

治安情報 2011 年 第 3 四半期報告書

対象地域	フランス リヨン (及びローヌアルプ州)	在リヨン出張駐在官事務所 リヨン日本人会治安情報収集チーム	
		作成日	対象期間
調査方法 新聞 サイト	Le Progrès	2011 年 9 月 30 日	2011 年 7 月～9 月
集計情報の流布	未	在留邦人対象に各団体及び在リヨン出張駐在官事務所ルート	
調査項目：			

報告要旨

- I. ローヌ県における犯罪発生率：減少傾向

- II. 防犯カメラ：間もなくリヨンに新たに 60 台設置

- III 国民衛生：レジオネラ症の発生件数が増加、理由は不明

I. ローヌ県における犯罪発生率：減少傾向

昨日、Rillieux-la-Pape に新設された警察署において、国家憲兵隊から警察への警察業務の引き継ぎが行われ、その折にローヌ=アルプ地方知事は、ローヌ県の犯罪件数率が減少傾向にあることを発表した。

2011年1月1日から2011年7月27日までの期間に、一般的犯罪の発生率が1.24%減少

ローヌ県では、Feyzin、Chassieu、Ecully に続いて、Rillieux-la-Pape で警察業務が国家憲兵隊から国家警察へ引き継がれることになった。

こうした都市圏警察の目的は、犯罪発生の実況に対応して警察力を組織することで、予算節約ではなく効率向上を目指す。

ローヌ県における犯罪発生率の減少傾向は大幅ではないものの、2010年度と比較して高くなっている。また、同県の人口は増加していることを考えるとなおさらだ。こうして、2011年1月1日から7月27日までの間に、一般的犯罪率が1.24%減少し、6万4992件から6万4186件となった。

さらに、近隣軽犯罪はおよそ9%減少（警察管轄地区では-10%、国家憲兵隊管轄地区では-2.6%、2500件減少）を見せている。一方、事件の解明件数は、36.3%から37%に伸びている。

財産に関する犯罪は大幅に減少（-4.31%）しており、年度の最初7ヶ月で2010年度の4万2960件から4万1109件となっている。

最も減少傾向が強いのが、商業店舗への空き巣（-27%）、強盗（-41.3%、184件から108件）、車の放火（1133件から1091件）。

その一方で、相変わらず増加傾向にある犯罪が2つある。詐欺、経済・金融関連の犯罪（+16%）、住居を狙った空き巣（+9.2%、2815件から3075件）だ。

交通安全では、死亡者が2010年に52人だったのが2011年同期は39人と減っている。このカテゴリーに関しては、「飲酒運転の厳しい取締りにいっそう力を入れていく」と地方知事は語った。

（以上プログレ紙、8月2日付）

II. 防犯カメラ：間もなくリヨンに新たに60台設置

現在リヨン市に設置されている238台の防犯カメラでは、市全体の10パーセントがカバーされるのみ。今後2、3年の間に、リヨン8区に防犯カメラ設置が拡張され、

計 300 台が設置される予定。さて、その効果は？

リヨン市全体を監視するというわけではないが、2013 年～2014 年を目処に、60 台の防犯カメラが増設される。

現在市に設置されている防犯カメラの台数は 238 台で、2、3 年後に 300 台に達することになる。これまで設置対象外だったリヨン 8 区も、3 箇所（Grand-Trou、Place Louis-Lebret、Boulevard des Etats-Unis および Mermoz）に防犯カメラが導入される。

360° 回転、ズーム、移動

ローヌ県の他の市町村に倣ってリヨンのカメラ監視が強化されるが、その効果に疑問を持つ人もいる。リヨンでは、防犯カメラが設置されて以来犯罪率が 20 パーセント減少した。但し、カメラの設置が直接この減少傾向に結びついているかどうかを判断することはできないため、この結果は慎重に扱う必要がある。というのも、防犯カメラの設置を拒否している Villeurbanne 市でも、犯罪率が下がっているからだ。

しかし、リヨン都市監視センターでは防犯カメラの効果を疑う職員は誰もいない。4 台の巨大なスクリーンを前に、3 名の職員が 24 時間態勢で市を監視している。リヨン 1 区市庁舎広場でハンドバッグをひったくられた母親、Saint-Jean 地区で具合が悪くなったお年寄り、Paul-Bert 通りでのちょっとした麻薬密売、ローヌ河岸での喧嘩、Guichard 広場での交通事故…。担当部署から、職員たちはジョイスティックを使ってカメラを自在に操作する。360° 回転、ズーム、移動。高解像度。異常事態を発見したら、すぐに警察、救急隊、TCL など関連組織に連絡する。

本来、犯罪防止を目的として設置されたこれらの防犯カメラは、もちろん、警察官のパトロールに取って代わるものではないが、2001 年より「公共空間における異常事象の測定と通報のための重要な手段」となった。

このようなシステムはいうまでもなくコストがかかる。市は、ジェラルール・コロン現市長の第一任期の間に 650 万ユーロ、第二任期の間に 300 万ユーロを投資した。これに保守整備費（2010 年には 26 万ユーロ）が加算される。

防犯カメラが事件捜査に役立つとき

- Saint-Jean 地区殺人事件

2011 年 1 月 9 日（日）早朝、リヨン 5 区の Saint-Jean 地区にあるパン屋で列に並んでいた男性がナイフで刺されて死亡した。1 月 14 日、警察は、防犯カ

メラに写っていた容疑者3人の映像を公開することを決定した。翌日、Le Progrès 紙は、複数の男性と女性1人の正面と背中姿が映った写真を掲載した。この異例の公開により、捜査の大幅な進捗が可能となり、この目撃者への呼びかけのお陰で3人の男性の逮捕に至った。

- 防犯カメラのお陰で事件解決件数2倍

捜査官にとってカメラ監視は貴重だ。こうして今月、強姦容疑者が再び犯行にいたるのを防ぐことができたのも、防犯カメラのお陰。2箇所ですら2人の女性を襲ったこの容疑者を、リヨン都市監視センターの職員たちはカメラに収められた映像から見つけ、住居までつきとめた。

店舗に設置されたカメラの映像も犯人をつきとめるのに役立つ。今夏、プレスキル地区で猛威を振っていた空き巣も、とうとう防犯カメラの犠牲者となり、カメラに写っていると分かってこれを壊そうとしたがもう遅かった。スーパーマーケットで銀行カードの不正使用をはたらいた容疑者の若者2人の姿も、スーパーの防犯カメラの映像に鮮明に写っていた。また、バスの車両内に取り付けられた防犯カメラのお陰で、iPhoneを盗んだ犯人が警察に逮捕された。

Global Cashの強盗事件はライブで見た：リヨン都市監視センター職員の証言

「当センターの業務は1日の時間帯によって異なります。午前中は警察のために映像の視覚・検索を行いながら、防犯カメラは主に歩行者道や交通量の多い通りに集中して交通事故の発生を監視します。夜は市庁舎前のTerreaux広場やローヌ河沿い、Romain-Rolland通りを優先します。これまでの経験や警察署からのフィードバックで、どのような場所を監視すべきか判断できます。何に注目するかといえば、疑わしい態度や歩き方、フードなどです。万引き、喧嘩…。毎日、犯罪の映像が目飛び込んできます。9月(2010年)に起きた外貨交換所Global Cashの強盗のときちょうど勤務中でした。武器を持った覆面の男たちが車から降りてくるのが見えたので、至急警察とTCLに通報して、地下鉄出口を閉鎖できるようにしました。そして3台のカメラの映像を提供しました。」

(以上プログレ紙、9月21日付)

III. 公衆衛生：レジオネラ症の発生件数が増加、理由は不明

通常夏に発症のピークが見られるこの感染症の発生件数が、2010年に、特にフランス東部で大幅に増加したが、その理由は明らかにされていない…

通常、発生件数が最も多いのは、8月と9月の、長期休暇から戻る頃だ。温水や

湿気の多い環境を好むレジオネラ菌にはまだまだ不明な点が残し、昨年的大幅な発症は数多くの疑問を投げかけている。

報告発生件数は2005年の1527件から2009年には1206件に下がったものの、昨年(2010年)には1540件にのぼり、+28%の増加を見せた。そして、フランス東部が最も発生件数が多く、住民10万人あたり、フランシュ=コンテ地方で6.2件、オーヴェルニュ地方で4.1件、ローヌ=アルプ地方で3.8件が報告された。これはブルターニュ地方の0.6件と比べるとときわめて高い。

集団発症ケース以外ではさまざまな原因

発生件数が急上昇するのはきわめて意外な傾向だ。この発生率の格差の裏に、医師がこの感染症に比較的敏感かどうかに応じた医師による診断の格差が隠されているのだろうか？ フランス公衆衛生院は、年末までに、この疑問に対する答えを見つけなければならない。

しかし、研究者が解明しなければならない謎はこれだけではない。なぜ、ピークが8-9月(+73%)ではなく1月(+117%)だったのか。インフルエンザあるいはその他のウィルスとの共同感染も考えられるが、実証されてはいない。2010年には集団発症が見られなかったため、研究者らは感染源についても思索する以外にない。1990年代末から2000年中頃まで、発生源は冷却塔というケースがほとんどだったが、その後規制や対策、検査が強化された。ローヌ県では、2005年春に30件あまり、2008年8月に10件あまりが報告され、これらの冷却塔が発生源と疑われたものの、最終的な確認はできなかった。また、2003年の猛暑以来個人宅にクーラーが数多く設置されているが、これらにはリスクはないという。

レジオネラ・ニューモフィラは、天然の淡水(沼や河川など)や多湿環境で繁殖する。ヒトへの感染は拡散した微小な水滴(エアロゾル)の吸入による。こうして、主な感染源は比較的低温のシャワー(25°C~42°C)、冷却塔の冷却システム、ジャグジーなど。潜伏期間は2日から10日、さらに2週間に及ぶこともある。免疫不全者や喫煙者、及び50歳以上の男性が特に感染しやすい。わずかだが、子供における発症ケースも報告されている。

最初の症状は、無気力、発熱、頭痛、筋肉痛、時に錯乱状態。初期の軽い咳がほんの数日で重傷の肺疾患になるため、早急に医療処置を行う必要がある。早期に正しく診断されれば、適切な抗生物質を使った早急の手当てにより完治できる。ところが、免疫不全者の場合や処置が適切でなかった場合の死亡率は40%から80%にのぼり、呼吸不全などの重篤な後遺症を残す場合もある。

(以上プログレ紙、9月7日付)